

会議名称	県立中井やまゆり園改革アドバイザー会議
開催日時	令和7年10月29日（水）14時00分から17時10分
開催場所	新庁舎第5B会議室
出席者	佐藤議長、渡部副議長、大川委員、小西委員、隅田委員、野崎委員 高原委員、中西委員、羽生委員
問合せ先	障害サービス課 支援改革グループ
会議概要	以下のとおり

【議題1 アクションプランの取組成果の整理方法】

- 計画期間3年間で、園の事業計画や予算がどのように変わったのか等、マネジメントに関する指標を加えていく必要がある。
- 成果としての指標は外出ひとつとっても、一人当たりの外出回数が増えたかどうかだけでなく、その内容がどうだったか見えるようにして評価しないといけない。
- アクションプランの取組状況として、どこまで実行できて、どこが実行できていないのか見える化することが必要であり、そこから潜在的な課題が見えてくる。
- 有効な取組を見極めるため、応用行動分析の立場から、元の状態をベースに現状と比較し、どう変化したか検証するシングルケーススタディという方法がある。
- 入所時の利用者情報の整理は現状どうなっているのか。これまでは短期入所の方が日中どこに通っているか分からないということも多く、長生村の事件があって、今も命を預かる仕事をしている以上、早急に改善はしてほしい。
- 施設で受け入れる立場として、この情報がないと支援を考えていけないのだと市町村に働きかける役割があるのではないか。
- 個別支援計画を作るプロセスで本人と面談をすることは当然で、最低限半年に1回は本人と一緒に決めていくプロセスは、日々の業務そのものである。アクションプランに定める利用者面談も当たり前に行うべき業務である。
- 利用者満足度調査は、非常に大切な取組になってくると思う。

【議題2 個別事例の検証】

- 現場職員が検証を通じて、日常の小さな変化が大事だと気付いてもらえたことは良いことである。
- ただ、胃ろうや車いすになった経緯も含めて、突然に機能が落ちているように見え、日々の暮らしの連続性の中で、本人の時間軸、暮らし、状態を大切にしていって、過去を読み解いていかなとけない。
- 例えば、当時「利用者が廊下で寝そべてしまう」ことについて、本人にとってのどんな意味があったのか考えることが福祉的な検証である。
- 職員が関わらないことによって本人の変化に気づかないことで、医療側にもいつもと変わらず、元気であると伝え、様子観察となってしまう

- いのちの共有がどの程度できていたか、浮き彫りになればよい。
- 何十年も園に暮らしている利用者がいて、職員が配置転換した途端に流れが途切れてしまう。園の中での生活やストーリーを見るため、その方の生活を支援する職員のつながり、時代のつながりを見つめ直すことが大事で、その中に健康の問題や支援の問題がある。
- そのためにも園内の検証体制は、前回の検証をしっかりと共有し、検証する複数の職員で対話をしながら、気づきが得られるよう振り返っていく必要があり、組織としての計画性がないといけない。
- どの検証事例も車いすでの生活を余儀なくされていて、その原因は転倒等とされているが、人間が活動するには筋力が必要で、維持させるために、半年や年1回でも筋力測定をしてもらいたい。